

陳

情

書

(租糧令此例)

國  
長

12 小川町 池田紙店印

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

砂糖関税改正反對陳情書曰

近來一部砂糖業者、現行砂糖輸入関稅定率法ヲ不便トシ、第一、第二、第三、第四種糖ヲ全一種別ニ統一シ之レヲ所謂中並トシ、從來ノ第四種糖関稅率百斤四圓廿五錢ニ對シ三圓十錢以上適當ニ稅率ヲ低減シ所謂中並糖ノ輸入ヲ自由ナラシムル希望ヲ以テ関稅改正陳情書ヲ提出シタルヤニ、聞及ヒ候處右ハ我國產糖業ノ浮沈ニ関スル極メテ重大ナル問題ニシテ輕々ニ断スヘキモノニ無之下名各社ハ茲ニ反對理由ヲ陳情セサル<sup>得ル</sup>場合ニ立列リ申候

第一、各國保護政策問題

抑モ関稅政策ハ產業政策ト關連セル重大問題ナルヲ以テ一部當業者ノ區々タル利便又ハ現在目前

ノ事實其ノミニヨリテ之ヲ改變スヘキモノニ無之世界各  
國ノ保護政策ニ鑑ミ内國産業ノ實情ニ照シ國  
策的見地ヨリ之ヲ決定スヘキモノトス歐洲大戦後各  
國ニ於ケル砂糖保護政策ノ變化ハ實ニ驚クヘキモノ有之  
彼ノ自由主義ヲ以テ傳統的國是トセル英國スラ糖業  
保護法ヲ以テ内國甜菜糖業ニ對シ原價以上ノ補助  
金ヲ交付シ十ヶ年間は年産二百五十萬噸五十工場  
ノ設立ヲ理想トスル破天荒ノ獎勵ヲ漸行シタルカ如キ世  
界産糖ノ四分一ヲ需用スル大消費國タル米國カ僅ニ  
其二割ヲ自給シ得ルニ拘ラス戦后兩國ニ亘リテ関稅引  
上ケテ實行シ以テ國産糖業ヲ保護シタルカ如キ露  
國カ糖業上ニ共產主義ヲ除外シ糖業トラストヲ作  
リテ戦前以上ノ産額ニ到達センコトヲ期シ既ニ來

期ハ三割五分ノ増産ヲ豫想セラルルカ如キ「チエツクス  
ロウヴアキア」及波蘭カ内地消費及輸出糖ノ比  
例制度ヲ設ケテ糖業ノ保護及貿易ノ均衡策  
ヲ建テタルカ如キ獨逸及「バルカン」諸邦ノ砂糖監理  
ハ勿論濠洲モ亦外糖驅逐策ニヨリテ産糖ヲ増加シ  
更ニ土耳其ニ至ル迄糖業奨励策ヲ樹立シ着々政  
策ノ實行ニ邁進スルノ状真ニ目擊見マシキモノアリ  
之レ糖業獨立ノ如何ニ國家の大緊要事タルカラ  
最モ雄辯ニ説明スルモノニシテ近年世界産糖未層  
有ノ大增産ハ即チ其結果ヲ如實ニ表現シタルモ  
ノニ外ナラス「スクテ」世界的大増産ハニ大輸出地タル  
玫瑰、爪哇ノ兩糖ヲ以テ其販路ヲ東洋方面  
ニ驅リ投賣的商策ヲ以テ我國ニ殺倒スルハ一日

瞭然ノ事ナリトス

却説我國砂糖関稅定率法ハ國產糖業ノ保護俟  
勵ヲ主眼トシ自產自給ヲ目的トシテ制定セラレタル  
モノニシテ今ヤ我糖業ハ其庇護ニヨリ幸ニ相當ノ  
發展ヲ示シ殊ニ近年其發達著シク近キ将来ニ  
於テ其目的ヲ貫徹シ更ニ進ンテ國產糖ノ輸出ヲ期  
待シ得ヘキ氣運ニ向ヒ官民舉ツテ一層ノ奮勵努  
力ヲ致シツ、アル今日俄クニ提案ノ如キ改正實現セン  
カ勿ク其根底ヲ覆サレ関稅政策ノ根本目的モ亦  
破壊セラルヘキハ必然ナリ要スルニ我國関稅政策並ニ  
糖業ノ根本政策ヲ困却シ徒ニ目前ノ小利害ニ没頭  
シ現在ヨリモ稅率ヲ引下ケ更ニ門戸ヲ解放シ一層  
其輸入ヲ助長シ我國糖界ヲ外糖ノ蹂躪ニ委シ結

局自滅ノ悲境ニ陥ラシムヘキ関稅率改正ハ國家的  
見地ヨリ絶對ニ之ヲ排斥スヘキモノトス

### 第二、殖民政策問題

臺灣島領有以來年ヲ閱スルコト僅カニ三十年ニシ  
テ今日ノ發達隆昌ヲ致スルハ直接間接ニ甘蔗糖業  
ノ發達ニ負フ所ヲ大ナルハ何人モ之ヲ否定シ得サル  
ヘシ例ハ糖業者カ資カラ盡シテ土地生産力ノ増加ヲ  
謀ルカ如キ延長千三百哩ニ達スル輕便鐵道ヲ敷設シ  
テ地方開發ノ機開タルカ如キ農事改良ヲ續行シテ  
收穫ノ面目ヲ一新シタルカ如キ著シク臺灣民衆ノ  
富ヲ増殖シテ其生活向上ヲ来シタルカ如キ其外形ニ  
現ハレタル結果ノ一端ヲ示スニ過キス又北海道朝鮮ノ  
拓殖事業モ歐米ノ例ニ倣ヒ甜菜糖業ト之ニ伴フ

畜産業ノ奨励トニヨリ將ニ大肉産ノ氣運ニ向ハントス  
即チ糖業ノ發展普及ハ土地生産力ヲ増大シ廣ク勞  
力ノ需要ヲ喚起シ移民ヲ奨励シ文化發達ヲ促進  
スル等殖民地肉産ニ功獻スルコトヲ大ニシテ我國殖  
民政策ノ遂行ニ資スル蓋シ甚大ナルモノアリ然ルニ  
若シ外糖ノ競争圧迫ニヨリ國産糖業一朝ニシテ  
破壊セラレシカ殖民政策ニ蹉跌ヲ来スハ勿論多數  
從業者ノ生業ヲ奪ヒ既ニ投下シタル巨額資金ノ  
浪費ヲ招キ我國事業界ニ一大暗影ヲ投スル等  
其影響日真ニ寒心ニ堪エサルモノアリ

### 第三、國産糖破滅ノ問題

我國産糖業保護奨励ノ實施以來年ヲ經ルコト  
僅カニ二十有餘年ニ過キス幸ニ今日ノ隆昌ヲ致シ

タル慶賀ニ堪エサル所ナリ然レトモ翻テ我國産糖業  
ノ實際ヲ觀ルニ主トシテ原料ノ供給及其價格ノ關係ニ  
ヨリ其生産費外糖ニ比シ頗ル割高ナルヲ免レス動  
モスレハ外糖ノ競争圧迫ニ堪エサルモノアリ當業者ハ  
之レカ引下ケニ不断深甚ノ注意ヲ怠ラサリシ所ナリ  
トス大戦以來我國物價ノ暴騰、勞金ノ騰貴殊ニ食  
料品不足ニ因ル他農作物トノ競争上却テ年々  
生産費ヲ增高シ尙近來台灣ニアリテハ内地種米  
トノ對抗並ニ思想ノ變化等ニヨリ一層生産費ノ  
増加ヲ来サントスルハ最モ痛苦トスル所ニシテ加之  
不断暴風雨襲来ニ脅域セラレルノ不安アリ幾多ノ  
不利不便ト苦闘ヲ繼續シ專心一意所期ノ目的達  
成ニ努力シツ、アルノ實狀ニアリ特ニ近年我國ニ於テ漸

ク其端ヲ開キタル甜菜糖業ニアリテハ一段ノ不利益ヲ  
免レス我國産糖業ハ其現在ノ實状ヨリスルモ更ニ進  
ンテ今一層深厚ナル保護ヲ要スル頗ル切ナリト云フ  
ヘシ

由來玖瑪及瓜哇ノ兩島ハ天恵ニ富ミ生産條件頗ル  
有利ニシテ其砂糖生産費ノ低廉ナル他ノ追従ヲ許サス  
加之近來原料甘蔗ノ改良ト製糖技術ノ進歩トニヨ  
リ年々大增産ヲ續ケ品質モ亦著シク改善ヲ來シ  
益々其競争力ヲ増大シ將ニ東洋ニ來襲セントス現  
行稅率ヲ以テスルモ尚我國産糖業ノ危殆ニ類スヘキハ識  
者ヲ俟タスシテ明カナリ殊ニ交通至便ナル瓜哇糖ノ  
如キハ滔々タル勢ヒヲ以テ殺倒シ来リ精糖原料トシテハ  
勿論直接消費糖モ亦漸次敗路ヲ蚕食セラレ比較

的基礎薄弱ナル現在國産糖業ハ忽チ萎靡不振ノ悲  
境ニ沈淪スヘキハ疑ヲ容レス糖業ノ前途實ニ寒心ニ  
堪エサルモノアリ宜シク國家ハ此ノ狀勢ヲ洞察シ物價ノ  
趨勢並ニ世界的糖價ノ現狀ニ鑑ミ列國保護政策  
ノ變化ニ照シ我國國稅制定ノ主義精神ニ稽ヘ適當  
ナル國稅列上ケテ斷行シ以テ糖業保護ヲ全フシ速  
ニ自産自給ノ目的ヲ達成シ進ニテ國産糖輸出ノ理想  
ヲ實現スルノ政策ヲ遂行スルノ必要ヲ痛感スルノ時ニ  
當リ率然トシテ一部糖業者ノ國稅改正希望ノ陳情  
ヲ見タルハ甚クテ了解ニ苦ム所ナリ

第四、中雙使用問題

精製糖原料トシテ所謂中雙糖ヲ使用スルハ世界ノ  
大勢ナリ現行制度ハ製糖技術ノ進歩ニ伴ハス我

國稅制モ須ク大勢ニ順應シテ速カニ改正ヲ行フヘ  
シトハ一應妥當ノ感ナキニアラサレトモ右ハ大体砂糖  
輸出國ナルカ又ハ消費ノ大部ヲ輸入ニ仰ク國柄ニ  
テ始メテ何等ノ障害ナク之ヲ實行シ得ヘシト雖モ  
需用年額千二百方担ニ對シ既ニ年産千方担ニ達  
スル國産糖ヲ有シ而モ今漸ク發達ノ道程ニアリ  
保護奨励其宜敷ヲ得ハ進シテ輸出國トラントスル我  
國ニ對シ何等特別保護ノ途ヲ講セズ漫然急速ニ  
之ヲ安具行セントスルハ無謀モ亦甚シト云フヘシ  
尙國産糖業ハ現行國稅法ヲ基礎トシ二十有餘年  
ノ長キニ亘リ該法規保護ノ下ニ漸ク今日ノ成果ヲ奏  
シ得タルニ過キス從テ黃双着出ノ如キ多年苦心ノ下  
ニ生産費ヲ犧牲トシ一種獨特ノ黃双糖製造ニ成功シ

テ需用者ノ嗜好ニ適合セシメ以テ僅ニ外糖ニ對抗シ得  
ルノミ之レ生産費割高ナル我國産糖業カ克ク外  
糖ノ競争ニ堪エ列國ノ關稅保護ニ比シ其二分ノ乃至  
四分ノ低率ナル現行稅率ヲ以テシテ辛クシテ今日  
ノ發達ヲ見ル所以ニ外ナラス蓋シ不自然ナル黃双  
着色制度ヲ廢止シ一大革新ヲ加フルコトハ理想トシテ  
何人モ異議ナキ所ナルヘシト雖モ我國黃双糖ノ發達  
ノ由來進歩ノ順序ヲ顧慮セズ從來獲得セル安具益  
即一担一円五十錢乃至二円ノ格周ヲ無視シテ單ニ世界  
ノ大勢カニ反シ技術ノ進歩ニ伴ハストノ理由ト着色廢  
止ノ美名ニ迷ヒ一朝此制度ニシテ改廢セラレシカ我國産糖  
業ハ唯一ノ武器ヲ奪ハル其根底ヲ覆ハサルニ至ルヘシ故ニ  
假ニ提案ノ議ヲ正當ナリトスルモ現在及將來ノ外糖ノ競争

圧迫並ニ我國産糖業ノ現況ニ照シ此制度ノ変更タルヤ  
必ス相當ノ補償ヲ伴ハサルヘカラス然ラスレテ無償ニ之ヲ  
放棄セシメントスルハ徒ニ百万担乃至二百万担ノ加工輸出  
糖ニ眩惑シテ千万担ニ達セル我國産糖業ノ死活ヲ顧ミサ  
ルノ暴論多ク免レス殊ニ原料粗悪技術未ク凡哇玫瑰瑪  
ノ域ニ達セス容易ニ四種糖ヲ製出シ得サル我國ニ於テ  
ハ一層ノ痛苦ヲ感セシハアラス況ンヤ着色賞ノ如キ  
一担僅ニ六七銭ヲ出テサルニ於テヤ

### 第五、原料糖買付不利問題

原料糖ヲ黄双ニ限定セラル、結果先約ノ危険ヲ冒  
スノ必要ニ迫ラレ買付上不便不利益ヲ被ルコト夥カラ  
ストノ議モ亦改正理由ノ條ナレトモ右ハ會々戰時非常  
ニ際シ世界的砂糖大不足ノ秋ニ於テ各國競フテ玫瑰瑪又ハ

凡哇糖ヲ先約セル場合ニ現ハレタル一時的現象ニシテ今ヤ  
世界ノ糖界定定ノ域ニ入り其弊モ亦漸ク消滅ヲ見  
ルニ至レリ近年我國ニ於テ前年三四月ノ頃早クモ翌  
年度産凡哇糖ヲ競フテ先約スルヲ例トシタルカ本年  
ハ今日ニ至ルモ尙明年度凡哇糖買付ノ聲ヲ聞カサル  
ハ之ヲ立證スルモノト云フヘシ殊ニ將來其敗路殆ト東洋  
方面ニ局限セラルヘキ凡哇糖ノ如キハ其敗路ヲ得ル必要  
上進シテ黄双ヲ製造シ我國需要ニ應スヘシト断スルモ  
敢テ不當ニアラスト信ス且ツ我國凡哇糖買付ノ実情ハ  
投機思惑ノ爲メ年々必要以上多額ノ買過キラ爲ス  
ヲ常トシ現ニ本年ノ如キ三百餘万担ノ過剩買付糖  
ヲ擁シ寧シロ其処分ニ窮スルノ情態ニシテ税法改正ノ結  
果ハ輸入糖ノ範圍擴大セラレ其用途モ亦擴張セラ



ルニヨリ一層外糖買付ノ思惑ヲ挑発スルノミナラス  
輸入モ亦不當ニ促進セラレ我國貿易上ニ多大ノ悪  
結果ヲ齎ラスハ勿論我國糖界ハ之カ爲常ニ甚大  
ノ圧迫ヲ受テ精粗両糖業共ニ大不利益ヲ被リ其  
発達進歩ヲ阻止セララルヘシ

### 第六、精粗両糖競争問題

我國産糖業現在ノ生産設備ヲ以テテハ四種糖ヲ生  
産シ難ク而シテ全一稅率ノ下ニアリテハ四種糖ヲ製造  
スルニ非サレハ輸入糖ニ對抗シ得サルヲ以テ更ニ相當ノ  
資金ヲ投下シ其製造設備ヲ改造セサルヲ得ス而カモ  
四種糖生産程度ニ改造スルモ五種糖生産設備ニ改造  
スルモ其差額僅少ナルノミナラス直接消費糖トシテ  
市場ニ賣出シ得ス而モ外糖ノ使用ニ妨ケラレ原料

糖ニモ亦賣付シ得サル過剩産糖処分ノ必要上勢ヒ  
我國粗糖工場ヲ驅ツテ悉ク五種糖（即チ耕地白糖）  
工場ニ改造セシムルニ至リ資金ヲ徒費スルハ勿論生  
産費ヲ増加シ消費者ニ不利益ヲ被ムラシムルノミナラ  
ス現在ニ於テスラ生産過剩ニ苦ミツ、アル精製糖ノ販路  
ヲ蚕食シ茲ニ台灣白糖並ニ内地精糖間ニ有害無  
益ナル競争ヲ惹起シ遂ニ兩者ノ存立ヲ脅スニ至ル  
ヘシ

### 第七、結論

要之一部糖業者ノ改正意見ハ内外原料糖ノ操縦  
ヲ容易ナラシムルヲ以テ主タル目的トスルモノニシテ外列  
國ノ保護政策ノ大勢ト逆行シ内自産自給ノ國是ニ  
反戾シ我國産糖業ノ休戚ヲ顧ミサル謬見タルヲ免

カレス其加工輸出糖ニ関スル多少ノ利便ノ如キハ問題ノ  
 輕重大小固ヨリ今日ノ論ニアラス況ニヤ原料糖ノ操  
 縦ハ結局外糖投機思惑ヲ旺盛ナラシメ一層其弊  
 ヲ助長スルニ止マルニ於テラヤ之ヲ大觀スルニ改正案実  
 行ノ結果ハ得ル所甚ク少ナクシテ失フ所甚ク大ナル  
 之ミナラス我國関稅政策ノ根本義ニ反シ國產奨励  
 ノ産業政策ニ悖リ殖民政策ニ蹉跌ヲ招来シ徒  
 ラニ斯界ヲ紛乱裡ニ陷ル等現在ノ國情ニ適應セ  
 サルコト明白ニ付一部糖業者ノ利便ヲ目的トスル関  
 稅改正ニ斷レテ贊シ能ハサル所ナリ右我國糖業  
 ノ現状ニ鑑ミ陳情仕候間何卒宜敷御裁量奉  
 仰候也

大正十四年十月十四日

臺東製糖株式會社

取締役社長 安場 末喜

明治製糖株式會社

取締役社長 相馬 半治

南洋興産株式會社

專務取締役 松江 春次

新高製糖株式會社

常務取締役 浅田 知定

新竹製糖株式會社

取締役社長 赤司 初太郎

帝國製糖株式會社

專務取締役社長 松方正熊

新興製糖株式會社 石川 昌次

砂糖輸入關稅改正反對陳情書補遺

大正十四年十一月

一四二二一四  
南洋製糖常務田村藤四郎氏持来

大藏大臣 濱口雄幸 殿

林本源製糖株式會社 取締役社長	石川昌次
臺南製糖株式會社 取締役社長	鈴木梅次郎
東洋製糖株式會社 取締役社長	山成喬六
沙轆製糖株式會社 代理	武智直道